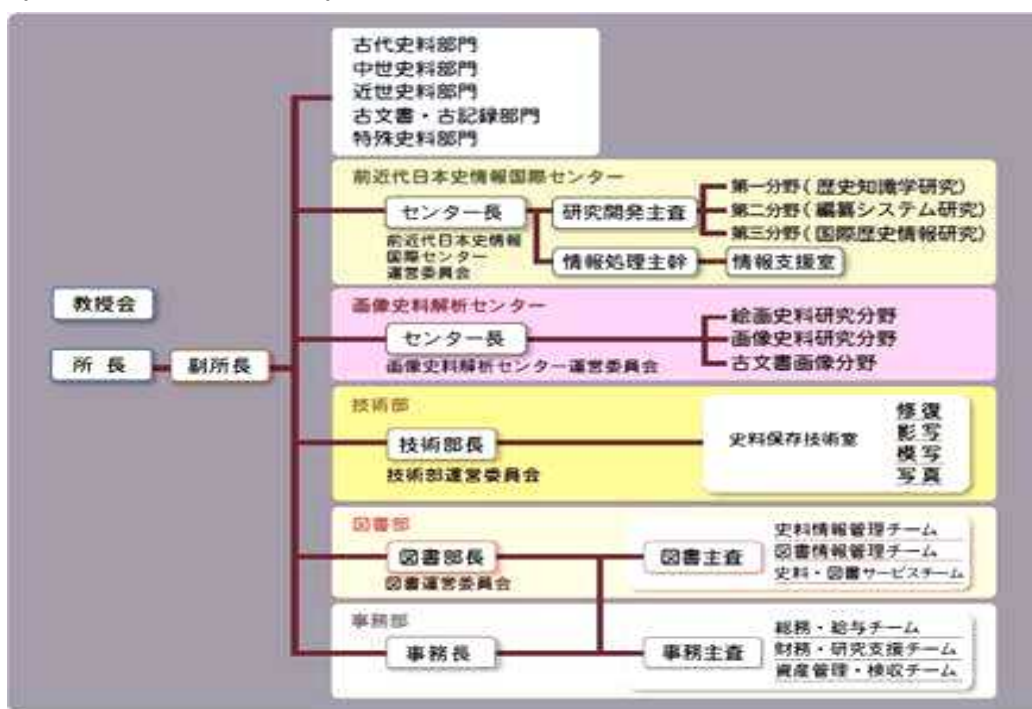


21 . 史料編纂所

史料編纂所の研究目的と特徴	・ ・ ・ ・	21 - 2
分析項目ごとの水準の判断	・ ・ ・ ・	21 - 5
分析項目	研究活動の状況	・ ・ ・ 21 - 5
分析項目	研究成果の状況	・ ・ ・ 21 - 15
質の向上度の判断	・ ・ ・ ・ ・ ・ ・	21 - 18

(資料 21 -3 : 組織図)



常勤の教職員数(人) (2008年3月段階)

	教 員				事務・技術	合計
	教授	准教授	助教	計		
専任	18	17	21	56	21(9)	81(23)
兼任	0	2	0	2		
特任	1	0	1	2		
計	19(3)	19(6)	22(5)	60(14)		

ほかに客員准教授 1 名

()内は女性教職員数

- 2) 5つの研究部門は、各時代や分野の日本関係史料を系統的に調査・収集し、史料学的な分析と研究の蓄積の上に、日本史研究の基幹となる史料集を編纂・刊行する。また、日本史研究における共同プロジェクト研究の拠点として活動する。
- 3) 画像史料解析センターでは、肖像画・絵図等の絵画史料、錦絵・古写真等の画像史料、古文書を画像解析する古文書画像などを対象に、画像史料の収集と解析、データベースの構築・公開を行い、所内外の研究者による画像史料研究プロジェクトの拠点として活動する。
- 4) 前近代日本史情報国際センターは、20年にわたる歴史情報研究が評価され、2006年度から発足した。日本史史料に関する歴史情報学的研究を行い、史料データベースの知識ベース化を進め、情報系研究機関との連携の下に、日本史史料の情報資源化のための研究基盤を形成する。
- 5) 本所の特徴としては、上記の諸活動を基礎に、東京大学の大学院・学部における系統的教育を行い、研究事業に若手研究者を参加させて優秀な若手研究者の育成に努めている。また、外国人研究員を受け入れ、国際的な日本学研究的支援・育成を図っている(資料 21 -4 : 若手研究員採用数等)。

〔資料 21 -4 : 若手研究員採用数等〕

職名 \ 年度	2004	2005	2006	2007
研究支援推進員	29	27	33	25
研究機関研究員	2	5	4	2
学術研究支援員	12	8	13	17
学術研究支援員(R A)	25	27	23	20
学術振興会特別研究員	15	10	6	9
計 (人)	83	77	79	73

外国人研究員採用数(うち DC)

外国人研究員	15(8)	23(9)	19(8)	25(9)
--------	-------	-------	-------	-------

6) 史料保存技術室を基盤に史料保存技術の維持・発展を目指し、全国あるいは地域における歴史研究と編纂、歴史系の博物館展示、歴史教科書や各種の社会教育の分野で、企画・執筆・講師・史料出陳等で連携・協力していることも活動の特徴である。さらに、多数の国宝・重要文化財を含む所蔵史料の保全を図り、博物館や企業・研究団体と連携して所蔵史料の公開と社会的利用を促進している(資料 21 -5 : 教員の社会連携活動)。

(資料21 -5 : 教員の社会連携活動)

項目 \ 年度	2004	2005	2006	2007	合計
1) 地方自治体の歴史編纂関係委員等	30	23	15	20	88
2) 国の(関連)機関委員等	4	6	12	10	32
3) 文化財等調査関係委員等	14	9	19	19	61
合計(件)	48	38	46	49	181

編纂・企画・執筆に従事したもの。各種審議会を含む。

歴史(社会科)教科書執筆者数

中学校	4
高等学校	7

[想定する関係者とその期待]

広く歴史学・日本史学の学界が関係者であり、日本の前近代に関する史料を系統的に調査・研究し、優れた研究成果の実現と史料の編纂(基幹史料集)・歴史情報の公開・発信に期待している。また、国や地方の機関、博物館や史料保存機関における歴史編纂事業・文化財保護事業・史料展示のほか、学校教育や各種の社会教育への協力や研究成果の還元を期待している。

分析項目ごとの水準の判断

分析項目 研究活動の状況

(1) 観点ごとの分析

観点 研究活動の実施状況

(観点到に係る状況)

国内外に所在する史料の研究調査と収集

基幹史料集の編纂や日本史研究を支える国内・海外の史料調査は年 100 件前後行われ、例えば 2007 年度の 1 人当たりエフォート値は約 11.67% となる (資料 21-6 : 出張延べ日数 (2007 年度の場合))。国内の調査先は、朝廷・公家、寺社、武家・大名関係など、全国 300 か所を超える史料保存機関・個人に及び、この中には正倉院など特別に閲覧調査が許可されたもの、東大寺などの大規模な寺社史料群、石見益田家文書などの武家文書群が含まれ、地域単位の悉皆調査なども系統的組織的に実施された (資料 21-7 : 史料調査件数と訪問先)。在外日本関係史料の調査・収集では、近年はロシア・中国・韓国などを重点的に行っている。マイクロフィルム等で収集した史料は年間 150~210 リールに及び、1,000~1,300 冊になる写真帳に編製して研究利用し、閲覧公開にも供している (資料 21-8 : 収集マイクロフィルム数と写真帳)。

(資料 21-6 : 出張延べ日数 (2007 年度の場合))

	国内出張	海外出張	計
出張延べ日数	1302 日	350 日	1652 日
うち科学研究費補助金による日数 (%)	625 日 (48.0%)	191 日 (54.6%)	816 日 (49.4%)
教員 1 人当たりの出張日数	22.1 日	5.9 日	28.0 日
総実働日数 (240 日) 比	9.21%	2.46%	11.67%

2005 年 4 月~08 年 2 月、ポルトガル・スペイン・イタリアにおける海外先進教育実践支援プログラム参加・日本関係史料の長期調査研究 (1 名) のデータは除く。

(資料 21-7 : 史料調査件数と訪問先)

	2004	2005	2006	2007	
国内調査件数	67	67	79	96	
延べ参加人数	195	195	225	242	
訪問先	都道府県数	28	22	29	33
	訪問先実数	81	73	126	140
	訪問先延べ数	355	364	332	347
海外調査件数	22	21	20	23	
延べ参加人数	40	43	37	49	
訪問先	訪問国数	11	9	10	11
	訪問先実数	24	31	26	31
	訪問先延べ数	34	40	37	81

(資料 21-8 : 収集マイクロフィルム数と写真帳)

年度	マイクロフィルム (リール)	写真帳 (冊)
2004 年度	153	1298
2005 年度	183	1012
2006 年度	213	954
2007 年度	194	992

マイクロ 1 リールは最大 600 コマ程度、写真帳は 1 冊 100~150 丁程度。

史料研究と基幹史料集の編纂・共同研究プロジェクト

2004年度以降、『大日本史料』など基幹史料集45冊を編纂・刊行し、本所の目標を着実に達成した(資料21-9:基幹史料集の編纂・出版一覧(2004~2007))。同時に、科学研究費補助金延べ138件を含む外部資金(年平均1.9億円余)を獲得し、史料研究と歴史情報蓄積に関する各種の共同研究プロジェクトに取り組んだ(資料21-10:主な共同研究プロジェクト(2004~2007、科学研究費補助金))。この結果、基幹史料集やデータベース以外に、教員個人の研究成果として計693件、1人当たり年平均3.1本の著作・論文が表された(資料21-11:教員個人の研究成果)。また、計18回の国際研究集会を含む34回の主だった研究集会を開催し、国際研究交流の面でも、中国・ロシアとの国際共同研究・研究交流や東アジアの歴史研究編纂機関における研究交流を深めた(資料21-12:国際研究集会と主な公開研究会)。

(資料21-9:基幹史料集の編纂・出版一覧(2004~2007))

	2004年度	2005年度	2006年度	2007年度
古代史料部門	『大日本史料』第3編27	『大日本史料』第1編・補遺4	『大日本史料』第2編29	『大日本史料』第3編28
		『大日本史料』第5編33		
中世史料部門	『大日本史料』第6編46	『大日本史料』第9編24	『大日本史料』第8編40	『大日本史料』第6編47
	『大日本史料』第11編24	『大日本史料』第10編25	『大日本史料』第7編32	『大日本史料』第11編25
近世史料部門	『大日本古記録』齋藤月岑日記5	『大日本史料』第12編58	『大日本近世史料』広橋兼胤公武御用日記8	『大日本近世史料』細川家史料21
	『大日本維新史料』類纂之部・井伊家史料24	『大日本近世史料』市中取締類集27	『大日本古記録』齋藤月岑日記6	『大日本近世史料』市中取締類集28
	『大日本古文書』幕末外国関係文書50	『大日本近世史料』細川家史料20	『大日本維新史料』類纂之部・井伊家史料25	
			『大日本古文書』幕末外国関係文書51	
古文書・古記録部門	『大日本古文書』家わけ第17・大徳寺文書別集真珠庵文書6	『大日本古文書』家わけ第10・東寺文書14	『大日本古文書』家わけ第19・醍醐寺文書14	『大日本古文書』家わけ第18・東大寺文書20
	『大日本古文書』家わけ第18・東大寺文書19	『大日本古文書』家わけ第22・益田家文書3	『大日本古記録』民経記10(完)	『大日本古記録』中右記6
	『大日本古記録』中右記5	『大日本古記録』実躬卿記5	『大日本古記録』後法成寺関白記3	『大日本古記録』後深心院関白記4
	『大日本古記録』後深心院関白記3	『大日本古記録』薩戒記3		
特殊史料部門	『日本関係海外史料』オランダ商館長日記・訳文編10	『花押かがみ』南北朝時代3	『日本関係海外史料』オランダ商館長日記・原文編11	
画像史料解析センター・その他				『荘園絵図聚影』釈文編・古代
				影印叢書1『島津家文書』
				影印叢書2『平安鎌倉記録典籍集』
計	11冊	12冊	11冊	11冊

(資料 21 -10 : 主な共同研究プロジェクト (2004~2007、科学研究費補助金))

実施年度	プロジェクト名	区分
2004	前近代日本史料の構造と情報資源化の研究	特別推進研究
2004	第二定型洛中洛外図屏風の総合的研究	基盤研究(A)
2004	禅宗寺院文書の古文書学的研究 - 宗教史と史料論のはざま -	基盤研究(A)
2004~2005	わが国における火山罹災地の複合的資料による歴史的文化・自然景観の復元研究	特定領域研究
2004~2005	禁裏・宮家・公家文庫収蔵古典籍のデジタル化による目録学的研究	基盤研究(A)
2004~2006	大規模武家文書群による中・近世史科学の統合的研究 - 萩藩家老益田家文書を素材に -	基盤研究(A)
2004~2006	前近代東アジアにおける日本関係史料の研究	基盤研究(A)
2004~2007	画像史料解析による前近代日本の儀式構造の空間構成と時間的遷移に関する研究	基盤研究(A)
2004~2007	荘園絵図の史料学とデジタル画像解析の発展的研究	基盤研究(A)
2005~2007	日本前近代史料の国際的利用環境構築の研究	基盤研究(A)
2005~2007	日本古文書ユニオンカタログの構築	基盤研究(A)
2006~2007	地図史料学の構築 前近代データ集積・公開のために	基盤研究(A)
2006~2007	江戸幕府・朝廷・諸藩の編年史・編纂史料集の史料学的研究	基盤研究(A)
2007	目録学の構築と古典学の再生 - 天皇家・公家文庫の実態復元と伝統的知識体系の解明 -	学術創成研究費
2007	日韓言語横断歴史資料検索システムの研究	基盤研究(A)
2007	東アジアの国際環境と中国・ロシア所在日本関係史料の総合的研究	基盤研究(A)

前近代日本史情報国際センター関係の共同研究・寄託研究は除く。 は継続中。

(資料 21 -11 : 教員個人の研究成果 (基幹史料集を除く))

	2004年		2005年		2006年		2007年	
	著作	論文	著作	論文	著作	論文	著作	論文
	合計(1人当たり)		合計(1人当たり)		合計(1人当たり)		合計(1人当たり)	
古代史料部門	2	25	2	26	0	15	3	29
	27(3.4)		28(4.0)		15(2.1)		32(4.6)	
中世史料部門	5	26	6	26	7	21	5	18
	31(2.4)		32(2.5)		28(2.3)		23(1.9)	
近世史料部門	11	42	8	43	13	38	6	35
	53(3.3)		51(3.2)		51(3.2)		41(2.7)	
古文書古記録部門	4	18	3	26	3	13	2	16
	22(2.0)		29(2.6)		16(1.8)		18(2.0)	
特殊史料部門	0	5	0	13	1	16	1	19
	5(1.3)		13(3.3)		17(3.4)		20(4.0)	
画像史料解析センター	1	22	0	31	1	22	1	16
	23(5.8)		31(7.8)		23(5.8)		17(4.3)	
前近代日本史情報国際センター					1	20	0	26
					21(5.3)		26(3.7)	
合計	23	138	19	165	26	145	18	159
	161(2.9)		184(3.3)		171(3.0)		177(3.0)	

参考：2002年は計127本(2.3)、2003年は計138本(2.5)。

著書には共著・編著・共編・研究成果報告書・史料集・校訂を含む。

前近代日本史情報国際センターは2006年設置、また各部門・センターの人員は年次によって流動している。

(資料 21 -12 : 国際研究集会と主な公開研究会)

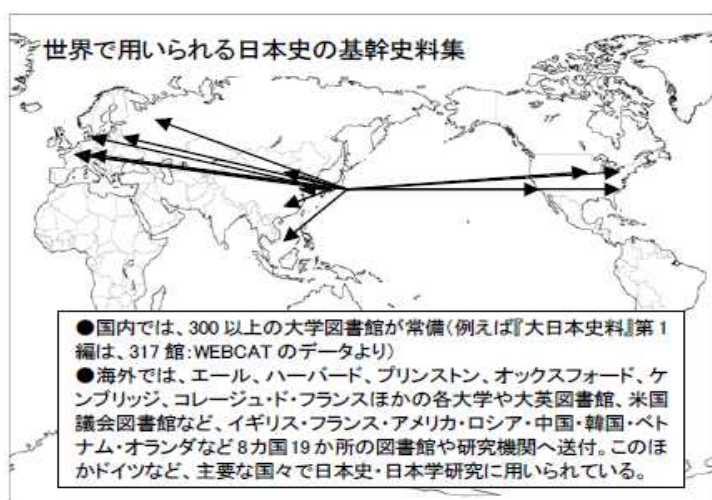
2004年7月	JMP 第五回国際研究集会「日本学研究における史料の諸相とその利用」
2004年7月	「前近代東アジアにおける日本関係史料の研究」第一回研究集会
2004年10月	国際シンポジウム「禅宗史研究の諸課題と古文書」
2004年10月	国際研究集会「日本関係海外史料研究 - オランダを中心に - 」(日本学士院 UAI 関連事業)
2004年10月	日蘭古写真国際研究集会(画像史料解析センター研究会)
2004年10月	第二回日仏コローク「ユーラシアにおける文化の交流と転変」(東京大学・フランス高等研究院共催、史料編纂所は実行委員会に参加)
2004年12月	第二回東アジア史料研究編纂機関国際学術会議「アジア史料の情報資源化と国際的利用」(JMP 第六回国際研究集会)
2004年12月	「前近代東アジアにおける日本関係史料の研究」第二回研究集会
2005年1月	『日本荘園絵図聚影』釈文編古代ワークショップ(画像史料解析センター研究会)
2005年1月	「前近代東アジアにおける日本関係史料の研究」第三回研究集会
2005年2月	第五回 JMP 公開研究集会「前近代日本の史料遺産プロジェクト: 成果と課題」(研究総括集会)
2005年3月	日蘭関係史に関する国際研究集会(日本学士院 UAI 関連事業)
2005年3月	第三回日露関係史料をめぐる国際研究集会(外務省認定日露修好 150 周年記念事業)
2005年7月	シンポジウム「ミシン・洋服・家電 - 戦後日本の経済と消費 - 」(史料編纂所共催)
2005年7月	東アジア所在日本関係史料をめぐる国際研究集会
2005年11月	国際研究集会「ティツィングとシーボルト - オランダ語史料から探る人物史研究 - 」(日本学士院 UAI 関連事業)
2005年12月	国際研究集会『日本関係海外史料オランダ商館長日記』(合評会)
2005年12月	「画像史料解析による前近代日本の儀式構造の空間構成と時間的遷移に関する研究」研究発表会(国立歴史民俗博物館共同研究グループと共催)
2005年12月	リスボン国際シンポジウム「日本とポルトガル」(ポルトガル国立東南アジア研究所と共催)
2006年1月	『日本荘園絵図聚影』釈文編古代ワークショップ(画像史料解析センター研究会)
2006年2月	『日本荘園絵図聚影』釈文編中世ワークショップ(画像史料解析センター研究会)
2006年3月	日露関係史料をめぐる国際研究集会 2006(日本学士院と共催、日本学士院 UAI 関連事業)
2006年7月	内務省引継絵図プロジェクト公開研究会「歴史のなかの地図・空間描写 測量」(画像史料解析センター研究会)
2006年7月	日本関係清代档案をめぐる国際研究集会
2006年11月	第二回東アジア史料研究編纂機関国際学術会議「東アジア諸国の史料資源と開発利用」(中国武漢市、史料編纂所は理事機関として参加)
2006年12月	日露関係史料をめぐる国際研究集会 2006 part2(日本学士院と共催、日本学士院 UAI 関連事業)
2007年1月	『日本荘園絵図聚影』釈文編中世ワークショップ(画像史料解析センター研究会)
2007年3月	「前近代東アジアにおける日本関係史料の研究」総括研究集会
2007年5月	日本関係清代档案をめぐる国際研究集会(日本学士院と共催、日本学士院 UAI 関連事業)
2007年6月	東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター開設 10 周年記念研究集会「画像史料研究の成果と課題」(画像史料解析センター研究会)
2007年7月	公開研究集会「歴史のなかの地図 地図 - 知の交差点」(画像史料解析センター研究会)
2007年9月	前近代日本史情報国際センター公開研究会「歴史知識学の創成 - 科学史・文化史研究と歴史知識学 - 」
2007年10月	『日本荘園絵図聚影』釈文編中世ワークショップ(画像史料解析センター研究会)
2007年11月	鳥取県民カレッジ連携講座(荘園絵図プロジェクト・画像史料解析センター研究会)

所内研究会や市民セミナー類は除く。

史料研究・編纂に基づく歴史情報の蓄積と公開・発信

収集した史料研究情報は写真帳やデータベース、刊行史料集の形で学界に提供された。『大日本史料』等の史料集は、国内及び世界の主要大学・主要図書館に備えられ、日本史研究に利用されている（資料 21 -13：世界で用いられる日本史の基幹史料集）。研究所の歴史情報研究は「他の人文・社会科学系機関においても模範とすべきもの」（第3回外部評価報告書、2004年）と高く評価された。2004年度以降は、研究成果公開促進費10件を含む外部資金を得て、テキスト系・画像系データベースを30件から36件と増やし、総データ件数は、2004年度当初の313万件から2007年度末に422万件へ約35%増を果たした（資料 21 -14：歴史情報データベース（テキスト系・画像系）とデータ数の伸び、資料 21 -18：科学研究費補助金交付件数及び金額、P21 - 13）。これらはウェブサイト上で公開・発信され、国内外からのデータベースへのアクセス数は月間25万件をピークに急速な伸びを見せた（資料 21 -15：データベースの月別アクセス件数）。

（資料 21 -13：世界で用いられる日本史の基幹史料集）



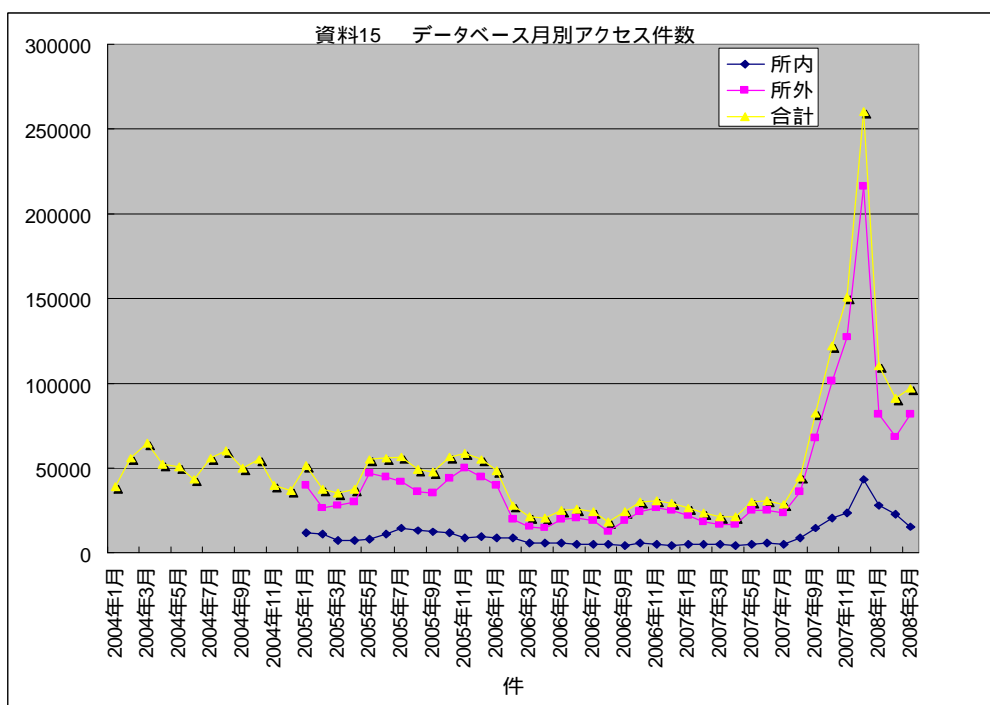
（資料 21 -14：歴史情報データベース（テキスト系・画像系）とデータ数の伸び）

No	データベース名称	2003年度末	2007年度末	増減	備考
1	所蔵史料目録	349,719	397,857	48,138	
2	編年史料綱文	274,858	233,361	-41,497	
3	維新史料綱要	24,507	45,624	21,117	
4	中世記録人名索引	186,501	192,778	6,277	
5	花押カード	29,772	29,772	0	1
6	編年史料カード	67,415	93,882	26,467	
7	大日本史料索引	1,032,938	1,330,824	297,886	
8	奈良時代古文書フルテキスト	1,127	12,902	11,775	
9	平安遺文フルテキスト	5,527	13,966	8,439	
10	古文書フルテキスト	48,376	54,989	6,613	
11	鎌倉遺文フルテキスト	12,051	35,124	23,073	
12	摺物	9,001	8,992	-9	2
13	古写真	1,967	2,057	90	3
14	肖像情報	25,607	25,608	1	4
15	史料編纂所所蔵肖像画模本	374	374	0	5

16	古記録フルテキスト	38,739	53,277	14,538	
17	大日本史料書名索引	453,315	517,779	64,464	
18	錦絵	4,619	4,619	0	6
19	花押彙纂	4,626	23,124	18,498	7
20	古文書目録・ユニオンカタログ	378,971	553,723	174,752	
21	大日本史料総合	451	4,115	3,664	
22	史料編纂所所蔵荘園絵図模本	27	28	1	8
23	金石文拓本史料	445	444	-1	9
24	歴史絵引	15,221	14,945	-276	10
25	応答型翻訳システム	21,724	31,900	10,176	
26	近世史編纂支援 索引型	28,840	127,082	127,366	
27	近世史編纂支援 標出型		14,216		
28	近世史編纂支援 目録型		14,908		
29	近世編年	86,706	98,977	12,271	
30	電子くずし字字典	33,683	133,621	99,938	11
31	欧文日本古代史料解題辞典		1,051	1,051	
32	調書管理システム		1,481	1,481	
33	古事類苑 総目録		41,554	41,554	
34	古事類苑 索引		64,202	64,202	
35	日本関係海外史料目録		44,303	44,303	
36	古地図・絵図所在情報アンケート		211	211	
合計		3,137,107	4,223,670	1,086,563	

1～11は画像史料解析センターの画像史料データベース
 データ数の減少は、データ統合と整理の結果である。

(資料 21 -15 : データベースの月別アクセス件数)



画像史料解析センターにおける画像史料研究

画像史料解析センターでは、2004年度以降、外部資金も得て計19件の共同研究プロジェクトに取り組み、画像史料データベース11件に対して約10万件のデータ作成・追加を行い、計10回の国際研究集会やワークショップなどを主催した(資料21-12:国際研究集会と主な公開研究会、P21-8、資料21-16:画像史料解析センターにおけるプロジェクト研究(2004~2007))。2007年には開設10周年記念研究集会等を実施し、中国研究者から倭寇画像に関する報告を得るなど、全国からの参加を得て成功させた。

(資料21-16:画像史料解析センターにおけるプロジェクト研究(2004~2007))

プロジェクト名(実施年度)	資金
〔第一分野:絵画史料〕	
近世大規模新田開発絵図の研究(2004)	CP経費・民間助成金(福武財団)
洛中洛外図屏風の研究(2004)	CP経費・科研費
一遍聖絵画像の研究(2004)	CP経費
歴史絵引・肖像画摸本の研究(2004~7)	CP経費
荘園絵図研究(2004~7)	CP経費・科研費・共同研究費
内務省引継絵図の研究(2004~7)	CP経費・科研費
荘園絵図と遺跡の一体認識研究(2005)	CP経費
中近世公家肖像画解析(2007)	CP経費
〔第二分野:画像史料〕	
幕末維新画像史料の研究(2004)	CP経費
近世武家儀礼の研究(2004~7)	CP経費・科研費
古写真研究(2004~7)	CP経費
萩野家旧蔵古写真の研究(2005)	CP経費
南島関係画像史料の研究(2005~7)	CP経費
〔第三分野:古文書画像〕	
所内デジタル素材実験(2004~7)	CP経費
花押彙纂の研究(2004~7)	CP経費
金石文拓本史料の研究(2004~7)	CP経費・科研費
装束類図版目録の研究(2005)	CP経費・科研費
崩し字データベースの研究開発(2005~7)	CP経費・科研費・寄付金(角川文化振興財団)
中国档案画像史料の研究(2006~7)	CP経費・科研費・日本学士院経費
CP(センタープロジェクト)経費は運営費交付金による研究所内の競争的配分資金である。	

前近代日本史情報国際センターにおける歴史情報研究

2006年度発足の本センターは、本所における歴史情報システムの維持・拡充を図るとともに、歴史知識学の創成と編纂の高度化・情報の国際化に寄与している。本センターには、情報学専門の特任教授を含む7名を配置し、科学研究費補助金や企業・研究機関との共同研究経費など総額6,700万円余を得て、2007年度は6件のプロジェクト研究に取り組んだ(資料21-17:前近代日本史情報国際センターのプロジェクト研究と経費)。

(資料 21 -17 : 前近代日本史情報国際センターのプロジェクト研究と経費)

プロジェクト名	費 目
歴史史料の知識ベース構造化と編纂事業の推進	特定事業費・特別教育研究経費 / 大学運営費・全学教育研究資金
知識データベース導入による歴史系テキスト管理システム高度化の研究	産学連携 - 共同研究経費 (先端科学技術研究センター)
大規模史料情報からの知識 DB の生成・構築研究および刊本編集システムに関する研究	共同研究 (大日本印刷)
学術文献データからの知識抽出に関する研究	共同研究 (NTT データ)
『鎌倉遺文』研究のバーチャルオーガニゼーションの構築	委託研究 (国立情報学研究所)
日韓言語横断歴史資料検索システムの研究	科学研究費基盤研究 A

研究資金獲得の努力と研究活性化

運営費交付金に加え、2004 年度以降は積極的な外部資金の獲得を行った。科学研究費補助金の申請件数は 2004 年度の 16 件から 2007 年度の 29 件まで 1.8 倍化し、新規採択数も 11 件から 22 件へと 2 倍化した。2007 年度の採択率は 76% の高率を維持し、研究計画の適正さとともにこれまでの研究成果への評価の高さを示している (資料 21 -18 : 科学研究費補助金交付件数及び金額、21 -20 : 科学研究費補助金採択状況 (2004 ~ 2007 年度))。寄附金や受託研究費による研究、企業との共同研究なども本格的に開始され、2007 年には「日本の道の歴史に関する資料の収集研究」(高速道路交流推進財団) などの共同研究 9 件が実施された (資料 21 -19 : 外部資金の獲得状況)。2004 -2007 年度に獲得した外部資金は総計 7.79 億円となり、これは常勤研究者 1 人当たり年間 330 万円程度になる。人件費を除いた運営費交付金は総計 12.38 億円余であるので、外部資金の比率は平均 3 : 5 程度まで増えている。このような外部資金獲得が上記諸分野における研究活性化につながった。

(資料 21 -18 : 科学研究費補助金交付件数及び金額 (単位 : 千円))

区分	2004 年度		2005 年度		2006 年度		2007 年度	
	件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額
COE 形成基礎研究費	1	180,000	0	0	0	0	0	0
特定領域研究	1	13,900	1	16,600	0	0	0	0
学術創成研究	0	0	0	0	0	0	1	85,800
基盤研究 (A)	7	70,400	7	58,100	8	54,500	8	63,100
基盤研究 (B)	3	8,700	1	2,800	2	8,500	2	6,800
基盤研究 (C)	1	1,200	2	2,400	3	3,400	8	9,400
萌芽研究	0	0	1	1,300	1	1,000	1	800
若手研究 (B)	3	3,400	5	4,300	8	5,400	7	4,500
若手研究 (スタートアップ)	0	0	0	0	1	1,290	2	2,400
研究成果公開促進費	3	13,400	3	13,200	2	7,200	2	7,300
特別研究員奨励費	15	15,900	10	9,436	6	6,000	9	9,600
奨励研究	0	0	1	750	1	530	1	650
合 計	34	306,900	31	108,886	32	87,820	41	190,350

上記のうち、画像史料解析センターのプロジェクト研究に直接かわる基盤研究 (A) は、2004 年度 3 件・2005 年度 2 件・2006 年度 3 件・2007 年度 3 件・2008 年度 2 件で、合計 1 億 1010 万円である。

2008 年度当初は計 44 件・総額 2 億 3364 万円 (一人当たり約 390 万円)。

(資料 21 -19 : 外部資金の獲得状況 (単位 : 千円))

区分	2004 年度		2005 年度		2006 年度		2007 年度	
	件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額
科学研究費補助金	34	306,900	31	108,896	32	87,820	41	190,350
寄附金	1	720	3	4,000	13	30,839	5	6,200
共同研究費					1	9,240	2	21,346
受託研究費					2	5,990	2	6,199
合 計	35	307,620	34	112,896	48	133,889	50	224,095

上記のうち、直接にデータベース開発費として獲得した資金は、科学研究費補助金研究成果公開促進費のべ 8 件 3380 万円・寄附金のべ 2 件 300 万円・受託研究費 1 件 500 万円の計 4180 万円である。

この間の運営費交付金 (物件費) は、それぞれ 293,056 千円・292,866 千円・339,593 千円・312,742 千円であり、総額 1,238,257 千円である。

(資料 21 -20 : 科学研究費補助金採択状況 (2004 ~ 2007 年度))

	2004 年度	2005 年度	2006 年度	2007 年度	計
申請件数	16	25	26	29	96
新規採択件数	11	13	13	22	59
採択率	69%	52%	50%	76%	61%
継続採択件数	23	18	19	19	79
採択件数 計	34	31	32	41	138

参考：2008 年度 (5 月段階) は、申請件数 22 に対し、新規採択 17 件で採択率は 77%、採択件数は計 44 件である。

観点 大学共同利用機関、大学の全国共同利用機能を有する附置研究所及び研究施設においては、共同利用・共同研究の実施状況

(観点に係る状況)

該当しない。

(2) 分析項目の水準及びその判断理由

(水準) 期待される水準を大きく上回る。

(判断理由)

年間平均 100 件ほどの出張調査件数を維持し、国内外の系統的組織的な史料調査・収集活動を継続した。また『大日本史料』や『大日本古文書』などの基幹史料集 45 冊を編纂・出版し、外部資金を確保して共同プロジェクト研究を推進した。特に科学研究費補助金研究の採択率・採択数を大幅に伸ばし、新たな形の外部資金も確保した。この結果、研究者の個人研究も発表数を大幅に伸ばし、グローバルな研究交流や国際研究集会の開催にも積極的に取り組むなど、研究は活性化した。データベース構築の面でも件数・データ数を増加させ、このウェブ公開・発信に対し、データベースへのアクセス数の急速な伸びが、国内外の社会的信頼感と高い評価を示している。以上から、期待される水準を大きく上回ると判断した。

分析項目 研究成果の状況

(1) 観点ごとの分析

観点 研究成果の状況(大学共同利用機関、大学の全国共同利用機能を有する附置研究所及び研究施設においては、共同利用・共同研究の成果の状況を含めること。)

(観点に係る状況)

- (1) 史料研究・編纂の面では、『大日本史料』などの基幹史料集 45 冊を公刊し、徹底した原本調査と網羅的収集、史料学研究の上に立った厳密な解読、異本の校訂など、歴史情報システムを活用した編纂成果は、優れた水準を維持している。基幹史料集については外部の専門研究者による出版物の第三者評価を実施し、「優秀な水準を維持」し「使命感をもって事業を進めている」と高い評価を得た(資料 21 -21 : 出版物第三者評価と評価委員会規則、別添資料 21 -1 : 第三者の外部評価委員による出版物評価結果(抄録)、P21 - 20)。また、外国語史料の研究・編纂では、ブリュッセルの国際学士院連合から「優秀(Excellent)」の評価を得ている(別添資料 21 -2 : 国際学士院連合(本部ブリュッセル)による日本関係未刊行史料プロジェクトへの評価結果、P21 - 22)。社会連携分野でも地域史編纂や教科書執筆などに研究成果が発揮された(資料 21 -5 : 教員の社会連携活動、P21 -4)。

(資料 21 -21 : 出版物第三者評価と評価委員会規則(平成 8 年 2 月 29 日制定))

第2条 委員会は、史料編纂所における研究・編纂・出版及び教育水準の向上と活性化を図り、もってその設置目的及び社会的使命を達成するために必要な事項について、客観的視点から点検・評価を行うものとする。

2007 年度の出版物評価は、下記委員によって行われた。

米田雄介(神戸女子大学教授、もと正倉院事務所長)

五味文彦(東京大学名誉教授・放送大学教授)

峰岸純夫(東京都立大学名誉教授)

三鬼清一郎(名古屋大学名誉教授、神奈川大学教授)

大野瑞男(東洋大学名誉教授)

- (2) 画像史料解析センターでは、所内人事を流動化し、競争的な経費配分による共同研究プロジェクトを実施した。学界をリードする肖像画研究や洛中洛外図研究、古写真研究、荘園絵図の図像学的解析などの成果を生み、「荘園絵図研究などの恒久的研究拠点」(研究集会報告書)として外部研究者からも認められた。特に、荘園絵図プロジェクトでは、『日本荘園絵図聚影』を公刊するとともに、高精細画像による「(伯耆国)東郷庄総合情報閲覧システム」を試験開発した。2007 年 11 月には鳥取県などの後援を得て、県民カレッジや公開授業を実施して「画期的なシステムの開発」(山陰放送)など、マスコミ報道でも高く評価された(別添資料 21 -3 : 画像史料解析センターの「東郷庄総合情報閲覧システム」開発の報道、P21 - 23)。社会教育・学校教育への活用が期待されている。また、NHK・朝日新聞等で速報された古写真研究の成果や実用の域に達した電子くずし辞書、古文書解析に有用な花押彙纂データベースの開発などの成果があった(別添資料 21 -4 : 画像史料解析センターの古写真研究に関する報道(朝日新聞、2007 年 10 月 30 日付)、P21 - 24)。

- (3) COE 形成基礎研究費「前近代日本史料の構造と情報資源化の研究」は、歴史史料の情報資源化という点で画期をなし、A の事後評価を与えられた。前近代日本史情報国際センターはこの研究を引継ぎ、歴史情報データベースの蓄積と知識データベースの研究を推進した。データベースへの信頼度や利便性は高く評価され、アクセス数は急速に伸びた。この情報発信については、「電子化された歴史学情報の発信源としても日本随一の存在」(『歴博』140、2007年)と高く評価された。
- (4) 外部資金の獲得によって共同研究プロジェクトが活性化し、優れた研究成果を生んでいる。朝廷や公家文庫の古典籍研究の成果は高く評価され、伝統的知識体系の解明を目指す学術創成研究「目録学の構築と古典学の再生」として継続されている。リストには掲載しなかったが、大規模武家文書としての石見の豪族・益田家文書の研究、近世武家儀礼の研究などは今後評価が定まる優れた研究である。このほか、個人研究の分野でも3名の受賞者を出すなど、優れた研究が評価されている(資料 21 -22 : 受賞者一覧)。

(資料 21 -22 : 受賞者一覧)

受賞者氏名	受賞年度	賞名等 - 受賞対象 -
稲田奈津子 (古代史料部門助教)	2004	東方學會賞(東方學會) 論文「唐日律令賤民制の一考察」および関連の研究活動
石川徹也 (前近代日本史情報国際センター教授)	2006	Eugen Wüster Special Prize (UNESCO) In recognition of indefatigable efforts to advance and promote the discipline of terminology
鴨川達夫 (中世史料部門准教授)	2008	野口賞(郷土研究部門)(山梨日日新聞他) 『武田信玄と勝頼』

- (5) 国の重要文化財指定(2005年)につながった大徳寺文書の研究は、史料保存技術の分野でも第一級の専門技術者を抱える本所ならではの優れた共同研究である。リストに掲載しなかったが、2007、2008年に同じく重要文化財指定をもたらした二階堂文書や比志嶋文書の研究など、優れた史料学の成果を挙げることが出来る。
- (6) 国際研究交流・共同研究の分野では、日中韓三国の歴史研究編纂機関会議の幹事機関を務め、2度にわたる国際学術会議を主催するなど、日本の代表機関として活動するとともに新たな国際交流のルートを開発した。ロシアを含む東アジア所在日本関係史料の研究では、ロシア国立歴史文書館・同海軍文書館・中国第一歴史档案館などが所蔵するロシア・大清両帝国の中央政府史料の目録化と体系的収集に成果をあげ、継続研究の科学研究費補助金も採用された。リスト以外にも、フランス高等研究院と共催した日仏コローク(2004年)の成果、日本学士院の国際学士院連合 UAI 関連事業として行った日蘭関係史料国際研究集会(2004~2005)ほかの優れた研究成果が挙げられる(資料 21 -23 : 国際交流と国際共同研究(2004~2007))。

(資料 21 -23 : 国際交流と国際共同研究 (2004 ~ 2007))

国名	相手機関	年次	内容：成果発表
フランス	フランス国立高等研究院	2004	第二回日仏コローク実行委員会に参加（実行委員長）：報告論文集の刊行（『東京大学東洋文化研究所論叢』）
オランダ	ライデン大学ほか	2004 ~ 2005	国際研究集会の実施（日本学士院 UAI 関連事業）：報告論文（『東京大学史料編纂所研究紀要』に掲載）
ロシア	ロシア国立歴史文書館・同海軍文書館・サンクトペテルブルグ国立大学・科学アカデミー東洋古籍文献研究所（旧東洋学研究所）	2004 ~ 2007	覚書にもとづき、日本関係史料の調査・収集、目録作成、国際研究集会の実施など。（一部を日本学士院 UAI 関連事業と連携）：報告論文（『東京大学史料編纂所研究紀要』に掲載）
中国 韓国	中国社会科学院近代史研究所 大韓民国国史編纂委員会	2004 ~ 2007	覚書にもとづき、東アジア歴史研究編纂機関会議の幹事団体を構成、本所が日本の幹事機関として 2 度の国際学会議を主催（2004・2006）
韓国	大韓民国国史編纂委員会	2004 ~ 2007	覚書にもとづき、研究者交流・日韓言語横断歴史資料検索システム開発の連携協力
ポルトガル	ポルトガル国立東南アジア研究所	2005	リスボン国際シンポジウム「日本とポルトガル」の開催：英文報告集の刊行
中国	中国第一歴史档案館	2006 ~ 2007	覚書にもとづき、日本関係檔案の調査・収集と目録作成（日本学士院 UAI 関連事業と連携）：報告論文（『東京大学史料編纂所研究紀要』に掲載）

(2) 分析項目の水準及びその判断理由

(水準) 期待される水準を大きく上回る。

(判断理由)

本所の研究成果である『大日本史料』や『大日本古文書』等は、出版物の第三者評価や国際学士院連合の事業評価でも高い評価を受け、我が国歴史学界の最高水準の基幹史料集として定着している。基幹史料集は、歴史情報データベースとともに学界に提供され、日本史教育や地域史編纂、社会教育にも幅広く活用されてきた。国内・海外に展開する史料調査と史料研究、共同プロジェクト研究は、本所の伝統と蓄積の力に依拠し、他の追随を許さない組織的系統的な研究成果を数多く生んだ。歴史情報としてウェブ公開・発信された成果は、広く国内外で利用されている。本所の研究成果は国際的にも高く評価され、歴史研究編纂機関として日本を唯一代表する機関として認められた。以上の点から、関係者が期待する水準を大きく上回ると判断する。

質の向上度の判断

事例1「前近代日本史情報国際センター設置による歴史情報研究の活性化」(分析項目1)
(質の向上があったと判断する取組)

2006年度に前近代日本史情報国際センターを設置し、新たに採用した特任教授ら3名を含む7名の研究者を順次配置して本格的な歴史情報学研究体制を整備した。この結果、自然科学系の研究機関や企業との連携が進み、外部資金による共同研究が開始され、センター特任教授は情報検索研究における顕著な業績によってユネスコのオイゲン・ビュステル特別賞を受賞した(資料21-22、P21-16)。アクセス数の急激な伸びに象徴されるように、構築した各種データベース(データ総数422万件)への社会的信頼度や期待感が増しており、歴史学と情報学の結合による新しい研究プロジェクトに活発に取り組んだことなど、研究の活性化があった(別添資料21-6:前近代日本史情報国際センター設立に関する論評(朝日新聞、2006年10月11日付)、P21-25)。

事例2「外部資金獲得と共同研究推進による研究の活性化」(分析項目)
(質の向上があったと判断する取組)

本所の史料調査と研究編纂事業はすでに100年を超える歴史をもち、この研究力量と高い研究水準を維持し、同時に共同研究プロジェクトを組織的に推進するため、2004年度以降、研究企画委員会をはじめ各種委員会体制の整備を行い、外部経費の獲得や共同研究推進に意識的に取り組んだ。その結果、科学研究費補助金の新規採択数では2倍と大幅に伸び、企業や他の研究機関との共同研究が本格的に開始され、10件の国際共同研究、18回の国際研究集会を含む34回の主要な研究集会を開催した。個人研究の分野でも、法人化前と比較して成果の発表数にも25%近い伸びがみられるなど研究の活性化がみられた。

事例3「在外日本関係史料調査を機軸とする国際共同研究の飛躍的展開」(分析項目)
(質の向上があったと判断する取組)

東アジアの重点的な海外史料調査を重点目標に掲げ、2004年以降、小委員会を編成して、日本学士院の国際学士院UAI関連・在外日本関係未刊行史料調査事業との積極的連携を図った。同時に東アジア歴史研究編纂機関会議の協定を締結し(2004年)、わが国の代表幹事機関として参加するなど、国際的な研究交流の土台を築いた。こうした意識的な取組によって、グローバルな研究交流を実現し、特にロシア・中国・韓国の研究機関との国際共同研究を推進した(別添資料21-5:中国第一歴史档案馆との共同研究についての報道(毎日新聞、2006年7月22日付)、P21-24)。この研究成果は国際研究集会や論文で発表され、革命前ロシア・中国における日本関係史料の目録化と複製史料数千点に及ぶ体系的収集に大きな成果をあげるなど、研究の質の向上があった。

事例4「画像史料解析センターにおける画像史料研究の進展」(分析項目)
(質の向上があったと判断する取組)

2005年の歴史情報システム更新に際し、文系研究所として最大規模のシステムを実現するとともに、高精細画像処理を可能とする機器のシフトアップを行った(資料21-24:2005年歴史情報機器のシフトアップ(リプレース)の主な方向性)。また、荘園絵図研究では地理情報を組み合わせる研究手法を導入し、平面画像を立体視可能な高精細画像による総合情報閲覧システムを開発した。これは社会的にも高く評価され、歴史教育への活用が期待されている(別添資料21-3:画像史料解析センターの「東郷庄総合情報閲覧システム」開発の報道、P21-23)。このほか、古写真研究や電子くずし字典・花押彙纂データベースの実用化開発など、画像史料研究の新分野を推進したことから、研究の質の向上があった。

(資料 21 -24 : 2005 年歴史情報機器のシフトアップ (リプレース) の主な方向性)

- 1) DB サーバの大幅増強 (データ 2000 万件に対応、画像ファイル使用域 1TB 5.5TB、その後 12TB まで増強)
- 2) WEB サーバの増強 (月間 200 万件のアクセスに対応)
- 3) 端末 PC の性能向上 (高精細・大容量処理に対応)
- 4) セキュリティー機能の強化